留学生の対人関係と適応
――日本人とのコミュニケーションと適応に関して――

張　　燕

Ⅰ．問題と目的

国際化時代を迎える日本ではここ数年，在日外国人が増える傾向を示し，特に日本での大学，大学院の外国人留学生の数は年々増え続けている。1990年には３万人にのぼっている。今日では，在日留学生の問題が日本政府の重要課題の一つとされるほど，多数の留学生を海外から受け入れるようになった。さらに日本政府は21世紀初頭には留学生を10万人にしようと計画している。

留学生の急増に伴って，いろいろな問題が出ている。例えば，教育制度上の問題，学習，研究上の問題などが表面化してきている。そして，その中でも留学生の適応問題は深刻な状況である。こうした諸問題を解決するために，現状把握のためのいろいろな調査が行われている。しかし，これらの調査は留学生の生活や学習などの実態を記述するものが多く，その実態が留学生にどのような心理的な影響を及ぼしているかまで明らかにされていない。すなわち，異文化における社会心理学的な問題までは分析しておらず，留学生や学校関係者の日本人の意見をまとめたり，集団的に調査して回答を統計的に処理し，それをそのまま掲載している報告書なのである。在日留学生の問題においては，心理学的な研究は非常に少ない。本研究は異文化を経験している留学生として，日本においての数少ない在日留学生研究を参考にして，心理学的な分析を試みるものである。

異文化心理学（Crss Culture Psychology）についての研究はここ数年盛んになってきたが，一つ注目すべき話題は「カルチャア・ショック」（異文化との接触がもたらす困難さ）の研究である。個人が異文化で生活するときのみ現れるという点では，カルチャア・ショックが文化的現象であり，その現れ方が個人によって大きな違いがあるという点で個人的現象でもある。カルチャア・ショックは個人によって身体的，心理的葛藤状況が異文化体験の時期，期間，程度の違いがあろうが，多かれ少なかれ誰もが経験するものであり，異文化理解やコミュニケーションや個人の成長に大きく寄与することが考えられる。従って，このカルチャア・ショック現象を理解するのに，カルチャア・ショックに影響する二つの重因――社会・文化的要因と個人的要因をまずよく理解しなければならない。在日留学生が異なる環境や異なる文化と接触し，一番多く直面している問題は，おそらく，いかに日本の社会に溶け込むかということである。すなわち，異文化適応についての研究が必要となってくる。

異文化適応（Acculturation または Cultural adjustment）とはある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて，異なった新たな環境に次第に慣れてゆくことをいう。異なる文化の特質，文化差や個人差などによって，異文化適応も違ってくると考えられる。

異文化研究にかかわるもう一つ重要な概念は“文化変容”である。個人がいかにして文化の変化に応じて適応していくかという問題がますます重要な話題になる現代社会において，文化変容現象は長期的ならび連続的に起きている。個人はどう適応するかについて，John W. Berry（1980）は個人が文化変容的な影響方向へ必然的に変化するかそれとも個人は精神的健康状態によって必然的にその影響を避けるという二つの仮定をし，また Berry（1980）は文化変容が適応として意味づけ，個人が文化変容に関する二つの中心問題（文化の独自性と特徴を維持する価値があるかの問題と他のグループとの関係を維持する価値があるかの問題）をどのように扱うかによって，統合，同化，分離と脱文化化の４つの文化変容様式を分けた。

以上により，現実的に在日留学生の問題について正しく理解し，解決する必要性に応じて，また異文化適応の研究にかかわる重要な概念――カルチャア・ショックと文化変容の概念を理論的により深く吟味，探究するために，在日留学生の異文化適応についての研究は十分な意味を持つと言えよう。

先行研究として，主に岩男寿美子と荻原滋の在日留学生に関する一連の研究（1977-1987），Rotter（1966）の定義した統制源（Locus of control）を開いて文化差を調べるという異文化領域での J. Stewar Black（1990）「国際間移動における統制源，社会的支持，ストレスと適応」といった研究を参考にした。

本研究の目的と仮説は以下の通りである。

まず，社会・文化的要因と適応の関係について目的１と仮説１に説明する。

目的１：異文化において，その文化に対する感情や評価によって対人行動にどういう影響を持つかを調べる。そ

れから，異文化行動パターンは適応にどのように関連するかを調べる。

仮説1：異文化において，その異文化の違いおよびその文化に対する認知スタイルによって，対人行動の仕方が変化するであろう。すなわち，異文化度が高いほど，その文化が「好き―よい」という認知スタイルをもつ人は日本の習慣ややり方に従うだろう；その文化が「嫌い―わるい」という認知スタイルをもつ人は自分の国の習慣ややり方に従って行動するのであろう。それから，行動パターンの「自文化中心」と「順応」のいずれかが重視されすぎる場合は外的適応も内的適応もしにくいだろう。「自文化中心」の行動パターンと「順応」の行動パターンのバランスがとれている場合，すなわち適応に距離を保っている対人関係の場合，外的適応も内的適応もしやすいであろう。

次に，個人的要因と適応の関連について，目的2と仮説2に説明する。

目的2：個人差を測るLocus of controlは適応にどのように影響するかを調べる。

仮説2：ものごとを自分で統制できるという信念をもつ内的制御タイプの人は外的適応も内的適応もしやすく，ものごとを周囲の環境，運などで決定されると思う外的制御タイプの人は外的適応も内的適応もしにくいであろう。

最後に来日期間が適応にどのように影響するかを調べる。

Ⅱ．方　法

1．実施方法

質問紙調査法を用いた。

2．対象（被調査者）

愛知県下の大学の留学生，計145名。145名のうち，アジア留学生は114人（78.6%），ヨーロッパ人留学生7人，北アメリカ人留学生6人，南アメリカ人10人，中近東からの留学生4人，アフリカ人留学生2人。また，名古屋大学教育学部および教養部の日本人学生，計112名をも対象として用いた。

3．調査期日

留学生は1990年3月から5月までにかけて調査を行い，日本人学生は1990年10月に調査を行った。

4．質問紙の構成

質問紙はA，B，C，D部分に分けられた。A部分は異文化適応に関する具体的項目であり，留学生の適応に関する社会・文化的な要因として取り上げ，日常の日本人の典型的な習慣や考え方，やり方に対して，留学生がどのように対応するかを測るための12項目から作成した。B部分は鎌原雅彦，樋口一辰，清水直治（1982）によるLocus of control尺度18項目を用いた。留学生のLocus of controlを適応の個人的な原因として取り上げる。C部分は対人関係における外的適応を測るための20項目から構成した。この部分は日常生活での対人行動の状態を測る。D部分は対人関係における内的適応を測るための10項目から構成した。この部分は対人関係における個人の精神的状態を測る。

Ⅲ．結果と要約

本研究は異文化における適応を明らかにすることを主たる目的とする研究であり，対人関係における社会・文化的要因および個人的要因と異文化適応との関連について探究するものである。この研究領域における実証的な研究は極めて少なく，研究のデザイン自体はかなり独創的なものであると考える。

本研究により，自文化と異文化の状況にあわせて行動する内的制御タイプの留学生は適応しやすく，自文化中心またはすべて日本文化に合わせて外的制御タイプの留学生は適応しにくいという傾向が見られ，これが留学生の異文化適応のメカニズムとなっている可能性が示唆された。異文化適応研究において，社会・文化的要因と個人的要因との双方が不可欠なものであることをふまえ，本研究ではこの2要因を社会・文化的要因が日本における典型的な習慣ややり方を取り上げ，個人要因がLocを取り上げるという観点から測ることを試みた。

異文化を研究対象とする場合，その文化を研究しなければ，異文化における適応の背景とそれに及ぼすより深いもの（感情，認知，行動など）を理解するには至らない。この意味で，今回の異文化適応研究と共に，適応に深い影響する社会・文化的要因の中の本質的なものを見い出そうとの試みは有意義なものといえよう。今後も個人的要因だけでなく，その社会・文化的要因のいろいろな側面も含めた観点から異文化における適応の研究を進めたいと思う。